

介護現場における役割の多義性に関する一考察

新潟医療福祉大学社会福祉学科
五十嵐紀子

【背景・目的】役割は、人が社会生活を送る中で、複雑な社会システムや人間関係を整理し、物事を合理的に進める機能を持っている。その一方で、役割のステレオタイプ化もされやすく、特に、個別的支援が重要視される医療・福祉分野において、個々の問題の本質を見えづらくしている問題もしばしば指摘されている。本研究では、高齢者介護現場における、従来の介護者—被介護者という図式がベースとなるパラダイムを見直し、役割の多義性について着目する。

【方法】新潟市の特別養護老人ホーム K において、主に利用者との話し相手をしながらの参与観察を行った。2014年10月～2015年2月に計10回訪問し、毎回4時間程度滞在した。参与観察を通して得られた3事例の解釈を手がかりに、従来の役割概念との比較をしながら検討した。

【結果】事例1) 80代女性利用者 A : Aには認知症の症状が見られる。Aの食事はミキサー食であったが、夕食時、自身の食器に盛られた料理の大半をトレーの片隅やトレーの外にスプーンで移動させるだけで自分は食べようとしなかった。Aに食事をとるよう促しながら、トレーとその周囲が汚れていく様子をしばらく観察していたが、自身の子どもたちだけでなく、近所の子どもたちが遊びに来ると食事の世話をしていた、という話をしていたことから、筆者に自分の食事を分け与えようとしていたのではないかと推測された。筆者が職員にスプーンをもらい、食器の外に盛られたミキサー食をひと口食べたのを確認すると、Aは食べ始めた。筆者が食べるのをやめると、Aも食べるのをやめるパターンが続いたことから、筆者と共に食事の時間を過ごそうとしていたと思われる。

事例2) 80代女性利用者 B : Bは認知症と診断されている。他の入居者や施設職員、筆者に対して暴言を吐くことも少なくない。筆者が後述の利用者 C と話している時、Bはひとりである時は大抵黙ってこちらを見ているだけだが、周囲に職員や他の入居者がいる時は、Cや筆者を非難する言葉を発することが多いことに気がついた。

事例3) 90代女性利用者 C : Cは同じ話を繰り返すことはあるが、認知症の症状は特に見られず年相応とのことである。Cは由緒ある商家の出身で、家には常に世話をしてくれる女中^{註1)}がいたという話をよく筆者に聞かせてくれた。筆者が訪問すると、職員にお茶やお菓子を出すように指示を出す。認知症によく見られるような時空の認知に混乱は見られないことから、Cの場合は職員を女中と認識

したり、施設を自宅とみなしているのではなく、それまでの生活歴によって客や友人のもてなし方のあり方により関心を向けていたのではないかと推測された。

【考察】事例1では食事を摂取することを促す「食事介助」を行う介護者としての役割を筆者は意識しつつ観察を行っていたが、Aの世界においては、筆者は逆にAに世話をされる役割を付与されていた。時空の認知が「今」「ここ」ではない認知症の利用者にとっては特に、介護者の役割は、利用者によって、またその時々で変化する利用者の時空によって多様に変化するものであることがわかった。

事例2ではひとりの介護者とひとりの被介護者という関係の中に、その他の他者が加わることで、Bに態度や行動の変化が見られた。複数の異なる関係性が多重に存在することで生じるこういった現象は、コミュニケーションとは相互作用的で、共同体的営みであることの現れであると言えよう。

事例3ではCの関心事は、筆者を友人あるいは客としてもてなすことであり、職員の役割はある意味「無視」されていたのではないかと考えた。Cの友人や客をもてなすコンテクストを再現するための「小道具」である茶菓は、「女中」的役割の職員から筆者に提供されるわけであるが、Cの世界では提供する女中の存在は表には出てこないである。

【結論】介護において、介護者と被介護者という関係の非対称性は解消すべきといった「対等」な関係性が重要であると強調する傾向がよく見られる。しかし、対等であるべきとしながらも、このような二項対立の関係性で捉えること自体が介護の現場における閉塞感を生み出してきたという指摘もある。本研究において、多様な生活歴に基づく価値観を持った利用者たちと対峙する中で、彼女らを単なる被介護者として捉えるだけでは見えてこない、多様で、多重の関係性が介護現場には存在していることがわかった。役割概念を見直し、その多義性への気づきを得られる環境づくりや、コミュニケーション教育のあり方についてさらに議論していくことが今後の課題である。

註

- 1) 現代では差別用語とされているが、幼少時代を語る利用者 C の使用した言葉として、そのまま記すこととする。

【謝辞】本研究の一部は2014年度新潟医療福祉大学研究奨励金(人文社会系研究費)の助成を受けて実施した。ここに感謝の意を表す。